

# パリ通信・第142号 2023年10月号

## チェルヌスキ美術館

今年の9月はフランスも記録的な高温が続き、10月中旬になりようやく秋らしくなった。イスラエル・パレスチナ武装勢力衝突の影響で、10月13日フランス北部パ・ド・カレ県アラスの高校で、教師ら数名を死傷させる事件が発生し、フランス政府は同日国内のテロ警戒水準を最高に引き上げた。戦争やテロ行為が続く恐ろしい世界で平和の有り難さ感謝しつつ、秋の穏やかな一日をパリ17区モンソー公園の一角にある「チェルヌスキ美術館」で過ごした。

イタリア人アンリ・チェルヌスキ(1821-1896)は、1848年オーストリア支配下にあったミラノを解放に導いた愛国主義者でローマ共和制(1848-1849)議員に選出されたが、共和制崩壊に伴いフランスに亡命した。パリで複数の事業に成功し、フランス第二帝政(1852-1870)の間はスイスに逃れ、1870年フランスが第三共和政に移行すると直ちにパリに戻り、フランスに帰化する。1871年パリ・コミュンにショックを受け、1871年9月から1873年1月まで美術批評家テオドル・デュレ(1838-1927)を連れて世界一周の旅に出る。アメリカ大陸を後にして日本、中国に滞在し、約5000点の東洋美術品を購入しフランスに持ち帰った。

1874年モンソー公園に接するヴェラスケス通りの土地を購入し、コレクションを収蔵する目的でネオ・クラシック様式の豪華な館を建て、東洋美術品に囲まれて暮らした。チェルヌスキは1896年イタリアに近い南仏マントンで死去するが、作品が散逸することを恐れ、1882年には館とコレクションをパリ市に寄贈することを決めており、1898年10月から「チェルヌスキ美術館」として今日なお人々に愛されている。



チェルヌスキ美術館



チェルヌスキが世界一周旅行からパリに戻った1873年から150年を迎えた今年2023年。150周年記念の特別展として彼が日本と中国で購入した美術品、特に阿弥陀像、香炉、陶器、漆器、根付け、江戸の挿し絵本などが展示されている(2023年10月6日から2024年2月4日まで)。19世

紀後半のヨーロッパは万国博覧会最盛期で、1867年パリ万国博覧会には日本も初めて参加し、将軍徳川慶喜の弟・昭武を派遣し膨大な出展物が海を渡りジャポニスム隆盛の契機となる。1889年のパリ万博時にはジャポニスム熱が頂点を迎え、サミュエル=ジークフリート・ビング(1838-1905)がパリに構えた日本美術専門店は大繁盛で、チェルヌスキ・コレクションも数を増していった。

チェルヌスキの日本滞在は横浜から始まり、東京(当時は江戸)、神戸(兵庫)、大阪、奈良を経て上海に渡り、インドネシア、セイロン、インドと旅が続く。彼が持ち帰った日本と中国の品々はヨーロッパの芸術家や職人たちを驚かせ、圧倒的な絶賛を受ける。

展覧会では銀器クリストフルのデザイナーとして知られるエミール=オーギュスト・レイベール(1826-1893)の「二匹の魚」(花瓶)、



ボンボン「大ふくろう」



フランソワ・ボンボン(1855-1933)の「大ふくろう」が備前焼と並べられ、江戸の伝統工芸の影響がいかに大きかったか明らかである。仏像、ブロンズ像、備前焼きの美しさが圧倒的である。

二階の写真展示室(保存のため照明を抑えた小部屋)にはチェルヌスキ美術館所蔵のイタリア人写真家(1850年イギリスに帰化)フェリーチェ・ベアト(1832-1909)の日本の写真(ファ

クシミリ版)が数点展示されている。ベアトはヨーロッパでいち早く東アジアの写真を紹介した人である。1868年2冊のアルバムとして販売された日本の写真集から「鎌倉の大仏」「愛宕山の鳥居」「大阪の四天王寺」「京都西本願寺」「行商人」「侍」「お坊さん」「鏡を見る娘」など当時の日本の風景が紹介されている。



私が訪れた日は「家族で過ごす週末」に重なり、5歳から10歳までの子供たちと付添いの父兄を対象にイベントを行っていた。日本のラジオ体操の音楽に合わせてウォーミングアップ。鬼や動物のお面を付けて阿弥陀像前でダンスをしたり、紙芝居を見たり、習字を習ったりと楽しそうだった。昔の日本の小学校を再現するようで、幼い頃に触れた文化は一生残るようだと感心した。150年前の日本をパリの高級住宅地区で再発見し、人が生きた証として残せるものの大切さを知り、自分は何を残せるのだろうかと思った。